

教材研究 『大和物語』 「安積山」 について

植田 敦子

はじめに

『大和物語』一五五段「安積山」は、内舎人であった男が大納言の娘を盗み出し、陸奥の山中に連れ去り共に暮らす、男の留守中、山の井に映った自分の衰えた容貌を見た女はそれを恥じ、男への思いを木に書き付け死んでしまう、帰ってきた男は嘆き悲しみ、遂には自らも死を選ぶ、という話で、作品の中心となる和歌が、女の詠んだ「安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」の歌である。

『万葉集』巻一六には、この歌とほぼ同じ「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」の歌がある。

また、『古今集』仮名序には「難波津の歌は、みかどの御初めなり。安積山の歌は采女のたわぶれよりよみて、この二歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の初めにもしける」と記されている。

さらに『今昔物語集』や『十訓抄』『古今著聞集』には、『大和物語』一五五段とほぼ同じ内容の話が存在しており、享受関係が推測される。

今回は、『大和物語』「安積山」の教材研究として、『万葉集』「安積山」の歌との関係、歌の解釈、姫ぬすみ譚としての位置づけ、後世の作品への影響等について、先行の論文を参考にしつつ、整理・考察していきたい。

一 『万葉集』「安積山」の歌との関係

まず、『大和物語』一五五段全文をあげておく。

昔、大納言の、娘いと美しくて持ち給うたりけるを、帝に奉らむとてかしづき給ひけるを、殿に近う仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、この娘を見てけり。顔かたち、いと美しげなるを見て、よろづのことおぼえず、心にかかりて、夜昼いとわびしく、病になりておぼえければ、「一切に聞こえさすべきことなむある。」と言ひ渡りければ「あやし。なにこそぞ。」と言ひて出でたりけるを、さる心まうけて、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃げて往にけり。安積の郡、安積山といふ所に庵を造りて、この女を据ゑて、里に出でて物などは求めて来つつ食はせて年月を経てありへけり。この男往ぬれば、ただ一人物も食はで山中にあれば、かぎりなくわびしかりけり。かかるほどにはらみにけり。この男、物求めに出でにけるままに三日四日来ざりければ、待ちわびて、立ち出で山の井に行きて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知

らでありけるに、にはかに見れば、いと恐ろしげなりけるを、いと恥づかしと思ひけり。さて詠みたりける。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものは

と詠みて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。男、物など求めてもて来て、死にて伏せりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見て返り来て、これを思ひ死にに、傍らに伏せりて死にけり。世の古ことになむありける。(※)

また、『万葉集』巻一六の歌は左注も含めて、次のようである。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

右の歌、伝えて云はく、葛城王、陸奥国に遣はされける時に、国司の祇承、緩怠なることはなは異甚だし。ここに王の意喜びずして、怒りの色面に顯れぬ。飲饌を設けたれど、肯へて宴樂せず。ここに前の采女あり、風流びたる娘子なり。左手に觴を捧げ、右手に水を持ち、王の膝を撃ちて、この歌を詠む。すなはち王の意解け悦びて、樂飲すること終日なり、といふ。(※)

では、『万葉集』「安積山」の歌と、本段の歌とはどのような関係にあるのだろうか。

まず、なぜ『万葉集』「安積山」の歌とほぼ同じ内容の歌が『大和物語』に存在するのか考えてみたい。考えられることとして、次の二つがあげられる。

・ある伝承歌が、『万葉集』の左註のような言い伝えと、『大和物語』のような純愛の物語との二系統に大きく分かれていった。

・『万葉集』巻一六「安積山」の歌を知っていた『大和物語』の作者、もしくは他の誰かが、ほぼ同じ歌を使った新たな物語を生み出した。

では、研究者の見解はどうであろうか。安藤享子氏は論文「物語にみられる類型性―大和物語一五五段を中心に―」(注)の中で、古今集の仮名序で「安積山」の歌がとりあげられていることを指摘した上で、

少なくとも古今集編纂時点では、「あさか山」と始まる和歌は「浅き心をわが思はなくに」と結ばれるように予想することが当然であっただろう。(中略)大和物語の成立を天曆五、六年ごろから円融朝あたりと考えるなら、古今集成立より後に下句の異なる「あさか山」の歌が出てきたとするのが穏当なところだろう。

と、『大和物語』「安積山」の歌の成立時期を推定している。

一方、森本茂氏は論文「大和物語の生成―万葉歌の歌枕意識」(注)の中で、万葉集の「安積山」の歌に関して、

この歌は、相手に対する深い思いを詠んだもので、恋歌でもあり、人を迎える際の挨拶歌でもあったのであろう。宴席で歌われることもあったであろうが、中央から派遣される客にはとくにロウカル色豊かな民謡として好まれ、これに近いようなハプニングを脚色して、左注が書かれたのだから、安積山の近くに国府のあった時代のことかと推測したり、葛城王は橘諸兄であると決

めてかかる必要もなからう。

と、万葉集三八〇七の左注を史実として扱う必要はないと述べている。

また、この万葉歌が詠まれた時期に関して氏は、同じく『古今集』で歌の父母とされている「難波津」の歌が法隆寺の天井格縁に落書きされているという事実^(註3)から、「安積山」の歌も七世紀を遡るころからの古い伝承歌であったであろうと推察している。

柿本奨氏は著書『大和物語の注釈と研究』^(註4)の中で、『万葉集』「安積山」の歌を紹介したあとに、次のように述べられている。

その歌は本段の歌と意味は殆ど同じであるが、歌句に相違があり、その左注の如くば作歌事情についても異伝である。歌が作者不明の伝承歌であるため左注の如き伝えが付いたのであり、本段の場合は百四十七段と同様、『万葉集』と直接関係がなく、こういう話の中にはめ込まれたのであろう。合成という意味で虚構の物語ではあるが、末尾に「世の古ごと」とある如く本段に発する虚構ではなく、既成の虚構物語を本段は伝承するのである。

現在の研究者の見解によると、ある伝承歌が、『万葉集』の左註のような言い伝えと、『大和物語』のような純愛の物語との二系統に大きく分かれていった、という見方が妥当であると思われる。

二 歌の解釈

次にこの二首の解釈である。再度それぞれの歌を示しておく。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものは^(註5)『大和物語』一五五段)

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに^(註6)『万葉集』卷一六・三八〇七)

二首の歌は、下の句に若干違いがある。

まず、共通部分である上の句についてみていきたい。『大和物語評釈』^(註5)をはじめとする多くの注釈書では「安積山の姿までが映っている、この浅い山の井のように」となっており、安積山の姿が山の井に映るといふ非現実的な状況が詠まれていることになる。これは、「安積山」の「アサ」と「浅く」の「アサ」との同音を意識してのことであると同時に、陸奥の名山である有名な「安積山」を歌に盛り込むという意図がはたらいているからであろう。

次に、「影」を何の影と捉えるかという問題がある。前出の『大和物語評釈』をはじめとする一般的な解釈では、「影」を「安積山の姿」としている。しかし、『大和物語』の場合は話の内容からすると、女は自分の醜い姿が山の井に映ったというのであるから、「安積山」は呼びかけ程度のもので、「影」は「女の姿」という解釈も成り立つのではないかと私は考える。一方、『万葉集』「安積山」の歌の解釈は、『萬葉集評釈』^(註6)をはじめ、多くの注釈書で影を「安積山の姿」としている。残念ながら、現段階ではこのことに対する調べが十分にできない状態であるので、『大和物語』の「安積山」の歌では「影」を「女の姿」とする可能性もあるのではないかと、という程度でとどめておきたい。今後、用例等を集め、引き続き考察していく予定である。

次に下の句を見ていく。

『万葉集』の歌は、国司の接待がおざなりで、それに不満を持った王の機嫌を直すため采女が詠んだという設定で、『大和物語』は、男によって東国に連れ去られた女が、帰って来ない男のことを思いながら詠んだ男への恋歌である。これについて、安藤享子氏は前出の論文「物語にみられる類型性―大和物語―五五段を中心に―」の中で、

下の句の相違は、歌の成り立っている場の違いであり、「浅き心をわが思はなくに」を「あさくは人を思ふものは」と読み替えたことで、一首が恋の要素を色濃く持つような読みぶりに変化している。

と指摘している。

また、森本茂氏は同じく前出の論文「大和物語の生成―万葉集の歌枕意識」の中で、

『万葉集』の「浅き心をわが思はなくに」という表現は、漢文訓読風の生硬な響きがあり、古体を感じさせはするが、詠唱に関しては優雅さに欠ける。そこで『大和物語』のような「浅くは人を思ふものは」という滑らかな調子のもも現れたのだろう。

と指摘している。古来から人々に好まれた伝承歌が時代とともに派生歌を生み、享受されていく様子が見えてくる。

下の句の解釈については、『大和物語』の歌は「浅い心であなたのことを思っていますか、いいえあなたを深く愛してします」、『万葉集』では、前出の『萬葉集評釈』などに見られるように「浅いこの山の井のような浅はかな心で、私がおあなたをお慕い申し上げているわけではありません」^{〔注〕}というように、女から相手への「浅くはない思い」を詠んだものと捉える解釈が一般的である。

この「浅き心」について今井源衛氏は、近世の諸注釈書等で『大和物語』の歌の「浅き心」が男の心と解されていることを指摘した上で、

しいて後者の意に解すれば、「あなたの愛が浅いとは私は思いません―あなたの愛情を信じます。」ということになるが、これは、この場合、女の気持ちの中に、自分の容姿に絶望すると共に、男に捨てられたかという不安や疑惑もあるので採り得ないであろう。(中略)現代の通説のように「あなたを浅く愛しているでしょうか、いや、心底深く愛しています」の意に解すべきである。

と、「浅き心」はやはり女の心と捉えるべきだとしている。^{〔注〕}

「浅き心」を男の心とする解釈は、私自身考えたことがなかったので新鮮ではあるが、やはり今井氏と同様、「浅き心」は女の心とした方が、解釈上自然であると考ええる。

三 『古今和歌集』『仮名序』の「安積山」

すでに二で触れたが、『古今和歌集』『仮名序』には次のように「安積山」の歌が登場する。

難波津の歌は帝の御初めなり。おほささぎの帝、難波津にて、皇子ときこえける時、東宮をたがひに譲りて、位につきたまはで三とせにかりにければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみてたてまつる歌なりけり。「この花」

はむめの花をいふなるべし。安積山の言葉は采女のたはぶれよりよみて、葛城王を陸奥へつかはしけるに、国の司事おろそかとなりとて、設けなごしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりてよめるなり。これにぞ、おほきみの心とけにける。この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。

やや小さめの字は「古注」であり、『古今和歌集』『仮名序』には本来なかつた部分である。

前出の森本氏の論文「大和物語の生成―万葉集の歌枕意識―」によると、「数々の『古今和歌集』の注釈書(注)から類推すると、古注は『大和物語』より後につけられたもの」ということだ。古注を除いた部分のみ示すと、

難波津の歌は帝の御初なり。安積山の言葉は采女のたはぶれよりよみて、この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。(案)

となる。つまり、「安積山」の歌は、「難波津」の歌とともに子どもの手習いに使用された歌で、当時の人にとつても身近な歌であつたことが窺える。

実際、『源氏物語』『若紫』の巻では、若紫に好意を寄せる光源氏が寄こした消息文に対して尼君が、
まだ、難波津をだに、はかばかしう続けざめれば、かひなくなむ

と、「まだ難波津の歌でさえ続け書きができない若紫であるから、源氏に対する返事はできない」と答えたのに対し、光源氏は尼君に

あさか山浅くも人を思はぬに など山の井のかけはなるらむ
と返しており、『古今集』『仮名序』の影響、さらには「歌の父母」である二歌の浸透ぶりが窺えるところである。

ただし、興味深いことに、現在伝わる古注を含んだ『古今和歌集』『仮名序』には「定家自筆嘉祿二年本」(『古今和歌集全評釈』片桐洋一・講談社・一九九八年二月 他)をはじめ、「これにぞ、おほきみの心とけにける」のあとに、『大和物語』一五五段と同一の、

安積山かけさへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものは

の歌が記されており、『万葉集』三八〇七とほぼ同様の注釈をつけながら、歌は『大和物語』と同一の歌が採られていることになる。

この事実からも、「安積山」の歌には「浅き心をわが思はなくに」と「浅くは人を思ふものは」の二系統が早くから存在していたと言えるのではないだろうか。

四 「姫ぬすみ譚」としての位置づけ

『大和物語』一五五段は「娘を盗み出す話」、つまり「姫ぬすみ譚」として位置づけられている。参考までに「姫ぬすみ譚」として位置づけられている主な作品をあげておく。(注)

『伊勢物語』 六段(芥川)、一二段(盗人)

『大和物語』 一五四段(ゆふつけ鳥)、一五五段

『更級日記』 竹芝寺伝説

『源氏物語』 夕顔の巻

『狭衣物語』 飛鳥井の姫君の「ぬすみすゑ」

中でも、本段は、男も女も相手を強く愛しているという点が他の姫ぬすみ譚には見られないと数々の研究者が指摘している。代表的なものとして再び前出の安藤氏の論文を紹介する。

右に見てきたように、この一五五段は、男も女も相手を強く愛しているということが根幹としてあるようだ。こうした話は他の「姫ぬすみ」譚には見られなかったようだ。一五四段にしても、女は将来の不安だけを歌で訴えている。そして「おそろし」「わびし」と思うだけで、男が話しかけても「いらへもせで泣」くのみで死を迎えてしまっている。ここでは女を盗む程の一方的な愛のみが語られているに過ぎないと言えよう。また、伊勢物語では、男の心も女の感情も描かれていず、それらは享受者の側にまかせられた格好になっていた。つまり大和物語一五五段は作者が前面に押し出て来て物語の人物を規定していると言えるだろう。

つまり、本段は「姫ぬすみ譚」の系譜にありながら、男と盗み出された女との間に愛が育まれていくという、男の思いに応える女の姿が描かれている点に物語としての発展性を見出すことができる。

五 後世の作品への影響

実は、この話とほぼ同じ話が『今昔物語集』巻三〇「大納言の娘内舎人に取らるる語」に採られている。内容的にはむしろ詳しく語られていて、物語としての発展性が興味深い。

長いので全文の紹介はしないが、特に姫君が男からの「極めたる大事にて、殿に申すべき事の候ふを、姫御前に申さむと思ひ給ふる」という申し出に、「何事にか有らむ。実に其の男は親しく仕はるるものなれば、はばかるべきにも非ず。自ら聞かむ」と、女房づてに答えており、連れ去られる前に姫君と男に接触があったという点が『大和物語』一五五段と大きく異なる。その結果男に「この姫君を取りて本意を遂げて後に、身をも投げて死なむ」というほどの激しい思いを抱かせてしまう。

それに伴い、最終部分は

此の事は従者の語り伝えたるにや、世の旧事になむ云ひぬる。然れば、女は従者なりとも男には心許すまじきなりとなむ、語り伝へたるとや。(※6)

となっており、『大和物語』が男女の純愛に対する作者の賛美であるのに対し、『今昔物語集』では当時の女性たちへの教訓を示す話に変化している。

『十訓抄』五の九や『古今著聞集』巻五・一八一では、『大和物語』にある話としてこの話が伝えられている。ただし、これらは『今昔物語集』とは逆に、かなり簡潔にまとめられている。参考までに『古今著聞集』の本文を載せておく。

むかし、大納言なりける人の、御門に奉らんとてかしづきける女を、内舎人なるものぬすみて、みちの国にいにけり。安積の郡安積山に庵結びて住みけるほどに、男ほかへいきけるままに立ちい

でて山の井にかたちをうつして見るに、ありしにもあらずなりにける影を恥じて、

安積山かげさへ見ゆる山の井の 浅くは人を思ふものは

と木に書き付けて、みづからはかなくなりけりと、「やまとものがたり」にしるせり。(※)

『古今著聞集』では、特にこの出来事に対する作者の評価は加えられていない。

『十訓抄』の本文もほぼ同じ内容である。

大和物語には、「昔大納言なりける人の、みかどに奉らんとてかしづきける女を、内舎人なるものとりて、みちのくににいにけり。あさかの郡のあさか山に、いほりを結びて住みけるが、男外へ行きたりけるまに立出でて、山の井にかたちをうつして見るに、有りしにもあらず成りにける影をはぢて、

浅香山かげさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものは

と木にかき付けて、みづからはかなくなりけり」としるせり。(※)

おそらく、一方が他方を引用したと考えていいであろう。『古今著聞集』と同様に本文のみからは特に批判性は読み取れないが、この話が『十訓抄』では女の身をつつしむべき例話を連ねている流れに配されている点を考慮すると、女の振る舞いに対し批判的な捉え方をされていると見ることができ、『十訓抄評釈』でも「女は振るまいをつつしむべきだという例話に仕立て直したのが本話である」と述べられている。なぜそのような受け取り方が変化していったかは、それぞれの時代での女性の位置づけにも関わってくると思われ、興味深い。時代背景も含めて考察していく必要があるが、今回はその考察まで及ばなかった。

終わりに

以上、『大和物語』一五五段の教材研究として、考えられる主な問題点について先行の論文を中心に調べ、整理・考察してみた。まだ追究が足りない点も多いが、今回の調べを通して作品への理解が深まったので、今後の授業で生かしていきたい。

なお、今回の内容は、四年ほど前に三省堂『高等学校 古典 古文編』の『大和物語』「安積山」の指導資料を執筆する機会があり、その時にまとめたものを大幅に加筆訂正したものである。その四年の間に、柳田忠則氏の『大和物語研究史』(注1)が出版され、本話に関連した論文の存在を新たに知ることができたのは大変ありがたいことであった。また、今回調べてみて、思った以上に『大和物語』一五五段を核にした世界が広がっていることを知り、まだ研究され尽くしていないこの作品のおもしろさを垣間見た思いがした。「安積山」の歌の解釈や、後世の作品への影響などまだ調べたい点が残っているので、今後の課題としたい。

注

注1 安藤享子氏「物語にみられる類型性―大和物語一五五段を中心に―」(『和洋国文研究』一九七七

年十二月号)

注2 森本茂氏「大和物語の生成—万葉集の歌枕意識」(『大和物語の考証的研究』和泉書院 一九九〇年一〇月)

注3 澤瀉久孝氏『万葉集注釈』中央公論社・一九六九年による。

注4 柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』武蔵野書院 一九八一年二月

注5 今井源衛氏『大和物語評釈 下巻』笠間書院 二〇〇〇年二月

注6 伊藤博氏『萬葉集注 八』伊藤博・集英社 一九九八年一月

注7 注6『萬葉集注 八』より引用。

注8 注5『大和物語評釈 下巻』による。

注9 『古今余材抄』(契沖)、『古今和歌集打聴』(賀茂真淵)、『古今童蒙抄』(一条兼良)、『古今和歌集全評釈』(竹岡正夫)を参考にされている。

注10 今井源衛氏『大和物語評釈 下巻』重川恵美氏「安積山の伝説—一五五段より—」(『大和物語探求』8号 一九七七年一〇月)等を参考にした。

注11 古橋信孝氏「安積山」説話考 (『へいあんぶんがく』1号 一九六七年七月)等を参考にした。

注12 柳田忠則氏『大和物語研究史』翰林書房 二〇〇六年一月

〈右記以外の参考文献・参考論文〉

・「大和物語の歌説話性と安積山伝説—娘ぬすみ譚を中心に」 舟田明子『二松舎大学人文論叢』一九九三年十月)

・「物語文学と伝説」 林田孝和 『体系物語文学史(1) 物語文学とは何かI』有精堂 一九八二年九月)

・源氏物語における采女伝説—「安積山の歌語り」をめぐる— 久富木原玲(『源氏研究』9号 二〇〇四年四月)

・女性拉致の話型組成 立石和弘 (『國文學』五〇巻四号 學燈社 二〇〇五年四月)

〈引用本文の出典〉

※1 『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(日本古典文学全集) 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子(小学館・一九七二年)

※2 『萬葉集四』(日本古典文学全集) 高木市之助・五味智英・大野晋(岩波書店・一九六二年)

※3 『古今和歌集』(新日本古典文学大系) 小島憲之・新井栄蔵(岩波書店・一九八九年)

※4 『源氏物語一』(新編日本古典文学全集) 阿部秋生・今井源衛・鈴木日出男・秋山虔(小学館 一九九四年三月)

※5 『金葉和歌集・詞花和歌集』(日本古典文学全集) 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩(岩波書店 一

九八九・九月)

※6 『今昔物語集』(新編日本古典文学全集 馬淵和夫・稲垣泰一・国東文麿(小学館 二〇〇二年五月)

※7 『古今著聞集』西尾光一・小林保治(新潮社 一九八三年六月)

※8 『十訓抄詳解』石橋尚宝(明治書院 一九二七年)